

平成 2 8 年 6 月 9 日現在

機関番号：3 4 3 1 0

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：2 4 7 3 0 6 0 7

研究課題名（和文）健康リスクテイキング行動のメカニズムの解明

研究課題名（英文）Study on the Mechanism for the Health-Related Risk-Taking Behaviors

研究代表者

柴田 由己（Shibata, Yuki）

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：5 0 5 5 1 7 7 7

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、健康リスクテイキング行動のメカニズムを解明するため、刺激希求、自己制御能力、社会規範が健康リスクテイキング行動に与える影響を解明することを目指した。一連の研究から、（1）刺激希求、仲間の飲酒規範、親の飲酒規範が青年の飲酒行動にそれぞれ直接的な影響を与えること、（2）刺激希求は仲間の飲酒規範を媒介して間接的にも青年の飲酒行動に影響を与えること、（3）その影響は年齢や性別により異なること、を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examined the influence of the sensation-seeking, self-regulation, and peer-norm on the health-related risk-taking behaviors among young adult. The result of this study indicated that (1) the sensation-seeking, peer-norm, and parent-norm directly influenced on the risk-taking behaviors, (2) peer-norm mediated the association between sensation seeking and the risk-taking behavior, (3) these effects were different by age and sex.

研究分野：パーソナリティ心理学

キーワード：健康リスクテイキング行動 刺激希求 自己制御能力 社会規範 飲酒 喫煙 時間割引 個人差

1. 研究開始当初の背景

喫煙、飲酒、肥満は、癌の発症や死亡率を高める健康リスクテイキング行動であり（国立がん研究センター, 2009）心理学だけではなく、医学、経済学などの多くの領域において、防止・抑制プログラムの開発に資する知見の集積が求められている。健康リスクテイキング行動の防止・抑制に影響を与える要因として、従来は、社会規範（Prentice & Miller, 1993）とパーソナリティ特性である刺激希求（Zuckerman, 2007）の影響が重点的に検討されてきたが、近年では、発達可能な自己制御能力の役割についても強い関心が寄せられている。自己制御能力は、衝動性をコントロールし、即時の満足を遅延する能力であり（Duckworth & Kern, 2011）例えば喫煙と癌の発症の関係のように、意思決定時点より遅延して健康被害が生じる健康リスクテイキング行動を抑制する効果が認められている（Daugharty & Brase, 2010）。健康リスクテイキング行動に関連するこれら3つの要因の相互関係について、先行研究では、刺激希求が社会規範の認知に影響を与えること（Horvath & Zuckerman, 1993）、刺激希求が自己制御能力に影響を与えること（Romer et al., 2010）が明らかになっている。したがって、国民に対する社会規範の啓発プログラム、自己制御能力の発達プログラムなどを含む、健康リスクテイキング行動の防止・抑制プログラムの開発には、これら3つの要因の相互関係を踏まえたメカニズムの解明が必要であると考えられる。しかしながら、刺激希求、社会規範、自己制御能力が健康リスクテイキング行動に与える影響について、3つの要因の相互関係を同時に検討した実証的研究は申請者の知る限り行われておらず、十分な知見は明らかになっていない。

そこで、本研究では、自己制御能力、刺激希求、社会規範の3要因に焦点を当て、自己制御能力の測度の明確化、要因間の相互関係、縦断的な変化を捉えることで、健康リスクテイキング行動である喫煙、飲酒、肥満のメカニズムを解明することを目的とする。具体的な研究内容として、以下3点を挙げる。

（1）自己制御能力の諸測度間の関連性：信頼性と妥当性の検証

自己制御能力は、衝動性をコントロールし、即時の満足を遅延させる能力であり、「実行機能」「時間割引」「自己評価式性格検査」「他者評価式性格検査」の4領域に大別される。健康リスクテイキング行動に伴う健康被害が意思決定時点よりも遅延して生じることから、先行研究では、将来の結果を過小評価する程度である「時間割引」を自己制御能力の指標として用いた研究が多く行われている（Kirby & Maraković, 1996）。自己制御能力の一側面である時間割引は衝動性に基づくとされるが（Ainslie, 1975）時間割引と

自記式の衝動性質問紙（例えば、BIS-11：Patton et al., 1995）の相関は低く、十分な妥当性は示されていない（Reynolds et al., 2008）。また、自己制御能力の諸測度についてメタ分析を行った Duckworth & Kern（2011）も、時間割引や実行機能など、自己制御能力の諸測度が十分な相互関連性を有していない可能性を指摘している。

そこで、本研究では、健康リスクテイキング行動の指標として多くの研究で用いられている時間割引を中心として、自己制御能力の諸測度の信頼性と妥当性について質問紙法と実験法を用いて検討することを第一の目的とする。

（2）刺激希求、社会規範、自己制御能力が健康リスクテイキング行動に与える影響の解明

健康リスクテイキング行動に関連する、刺激希求、社会規範、自己制御能力の関連性については、刺激希求から社会規範（Horvath & Zuckerman, 1993）、刺激希求から自己制御能力（Romer et al., 2010）への影響が認められている。先行研究からは、刺激希求が社会規範と自己制御能力を媒介して健康リスクテイキング行動に影響を与える可能性が推測される。しかしながら、3つの要因の相互関係を同時に検討した実証的研究は、申請者の知る限り行われていない。また、刺激希求、社会規範、自己制御能力が健康リスクテイキング行動に与える影響は、飲酒、喫煙、肥満など、健康リスクテイキング行動の種類により異なる可能性があるが、メカニズムの差異に関して同一集団のデータを用いた比較研究は行われておらず、十分な知見は明らかになっていない。

そこで、本研究では、刺激希求、社会規範、自己制御能力が健康リスクテイキング行動に与える影響について幅広い年齢を対象とした調査を行い、健康リスクテイキング行動のメカニズムを解明することを第二の目的とする。特に、健康リスクテイキング行動の種類、年齢や性別などの基本属性の影響を捉え、包括的な検討を行うことを目的とする。

（3）1年間の縦断研究による健康リスクテイキング行動メカニズムの変容の解明

先行研究では、種々の健康リスクテイキング行動に関するメカニズムの構造は年齢を重ねても不変であり、加齢に伴う量的変化が生じていることを前提とした研究が行われてきた。しかしながら、わが国では、法律で未成年の飲酒と喫煙が制限されており、飲酒と喫煙の意味合いが成年と未成年で異なる可能性がある。すなわち、未成年の飲酒と喫煙は、健康リスクテイキング行動であると同時に法的な逸脱行動であり、より厳しい社会規範が存在すること、行為によりもたらされる覚醒がより強いこと、そして、法律による

制限の存在が自己制御の必要性を減少させること、が推測される。したがって、健康リスクテイキング行動のメカニズムを縦断的に検討することは、各年齢に対する適切な防止・抑制プログラムの開発に資すると考えられる。

そこで、本研究では、飲酒、喫煙、肥満について、幅広い年齢を対象とした縦断調査を行い、飲酒と喫煙の法律制限が取り除かれる 19～20 歳までと他の年代の 1 年間の変化を比較し、健康リスクテイキング行動のメカニズムについて、法律制限と加齢が与える影響を準実験的に検討することを第三の目的とする。

2. 研究の目的

本研究では、自己制御能力、刺激希求、社会規範の 3 要因に焦点を当て、自己制御能力の測度の明確化、要因間の相互関係、縦断的な変化を捉えることで、健康リスクテイキング行動である喫煙、飲酒、肥満のメカニズムを解明することを目的とする。

3. 研究の方法

平成 24 年度は、自己制御能力の測度の信頼性と妥当性を検討するための調査と実験を行い、自己制御能力を測定する諸測度の位置づけを明確化する。次に、平成 25 年度は、幅広い年代を対象とした横断調査を行い、自己制御能力、刺激希求、社会規範の相互関係に焦点を当て、健康リスクテイキング行動のメカニズムの解明を行う。この研究では、健康リスクテイキング行動の種類、年齢、性別などの基本属性が与える影響についても検討する。最後に、平成 26 年度は、平成 25 年度の参加者を対象とした縦断調査を行い、健康リスクテイキング行動のメカニズムについて 1 年間の変化を捉える。特に、わが国では 20 歳以下の飲酒と喫煙が法律で制限されていることから、法律制限と加齢の影響に焦点を当て、19 歳から 20 歳への 1 年間と、他の年齢群の 1 年間で、健康リスクテイキング行動のメカニズムに変化が生じるかを検討する。

4. 研究成果

政府統計資料をもとに我が国の青年の健康リスクテイキング行動について調べ、書籍として報告した。「平成 22 年国民健康・栄養調査」からは、青年の喫煙率が低下している一方で、飲酒行動について大きな問題が残されていることが明らかになった。飲酒では、30～70 歳以上の者（週 3 日以上飲酒する者：男性 38.9%～61.7%、女性 7.5%～21.5%）に比べ、20 代の若者の飲酒頻度は低かった（週 3 日以上飲酒する者：男性 18.4%、女性 6.1%）。しかしながら、一度の飲酒における飲酒量が多い大量飲酒者の割合は 20 代の若者の方が高かった（アルコール 60g 以上の大量飲酒者の割合：30～70 歳以上：男性 2.2%

～21.2%、女性 0.6%～9.3%；20 代：男性 24.2%、女性 18.8%）。結果からは、飲酒量に男女差があること、また、弱年齢者ほど大量飲酒者の割合が高いことが明らかになった。この結果は、若者の健康リスクテイキング行動について、衝動性に基づくパーソナリティ特性（刺激希求や自己制御能力）と若者を取り巻く環境（社会規範）が影響を与える可能性を示唆するものである。

また、一連の調査研究の結果、（1）刺激希求、仲間の飲酒規範、親の飲酒規範が青年の飲酒行動にそれぞれ直接的な影響を与えること、（2）刺激希求は仲間の飲酒規範を媒介して間接的にも青年の飲酒行動に影響を与えること、（3）その影響は年齢や性別により異なること、を明らかにした。これらの結果は、青年期の健康リスクテイキング行動について、刺激希求をはじめとするパーソナリティ特性が中核的な役割を果たしており、飲酒行動の背景に刺激希求に基づく友人選択過程が影響を与えている可能性を示唆するものであった。

以上より、本研究では、若者の健康リスクテイキング行動にはパーソナリティ特性が中心的な役割を果たしており、刺激希求、自己制御能力、社会規範の関連性を捉えた種々の健康リスクテイキング行動の予防プログラムを開発する重要性を明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

柴田由己、刺激希求と親や仲間の飲酒行動が青年期の飲酒行動に与える影響、パーソナリティ研究、査読有、21 巻、2013、303-305
<http://doi.org/10.2132/personality.21.303>

Yuki Shibata Sex differences in the effects of disinhibition, perceived peer drinking, and delay discounting on drinking among Japanese college students. *Personality and Individual Differences*, 査読有、55 巻、2013、766-770
[doi:10.1016/j.paid.2013.06.011](https://doi.org/10.1016/j.paid.2013.06.011)

〔学会発表〕（計 4 件）

柴田由己、古澤照幸（2013）日本語版 Brief Sensation Seeking Scale の作成（1） 因子構造の検討 第 77 回日本心理学会大会 2013 年 9 月 20 日 札幌コンベンションセンター（北海道・札幌市）

柴田由己、古澤照幸（2013）日本語版 Brief Sensation Seeking Scale の作成（2） 信頼性と妥当性の検討 第 77 回日本心理学会大会 2013 年 9 月 20 日 札幌コンベンションセンター（北海道・札幌市）

Yuki Shibata (2013). Indirect effect of disinhibition on drinking: Interrelations among disinhibition, perceived peer drinking, and delay of gratification. International Society for the Study of Individual Differences 2013 Meeting. 2013 年 7 月 14 日 CosmoCaixa (Barcelona, SPAIN)

柴田由己 (2012) 未成年者と成年者の飲酒行動 - 刺激希求, 自己制御能力, 仲間の飲酒に焦点を当てた検討 - 第 76 回日本心理学会大会 2012 年 9 月 11 日 専修大学 (神奈川県・川崎市)

〔図書〕(計 1 件)

柴田由己 (2013) 「若者たちのライフスタイルと健康リスク」木村雅文 (編) 「現代を生きる若者たち」学文社 pp.103-113.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴田由己 (SHIBATA, Yuki)
同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員
研究者番号 : 5 0 5 5 1 7 7 7

(2) 研究分担者

なし
()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

なし

()
研究者番号 :